

## 目に見えない心への看護

「看護師さんってこんなに私のことを見ているんだ。」これは私が人生初の手術のため入院した夜の感想だ。私が入院したのは小児病棟。動物柄のパジャマ姿の子供、個室に響く赤ちゃんの泣き声、飾られたクマやウサギの形の折り紙、当時中学生の私の存在は周囲から浮いていた。あちこちで泣いている子供に圧倒され、私は誰もいない多床室の窓際のベッドに1人でいた。看護師さんは時々来て、いつの間にか夜勤の看護師さんになっていった。そんな環境で私は安心できず、そっけない対応をしていた。その夜、夜勤の看護師さんが寝る前の私の病室を訪れた。日中は看護師さんが見回りに来ても私の返す言葉は普段より短かった。廊下を駆ける看護師さんの忙しさを知っていたからこそ、私は普段よりも大人のように振舞おうとしていたのだと思う。しかし、その看護師さんとは長い時間話をした。入院してから長話をするのはその看護師さんが初めてで、学校や部活、家族、ダンスで全国大会に出たいことなどの話を私の横に座って聞いてくれた。患者と看護師ではなく、人と人が会話するようだった。初めて会った人とは思えない安心感を抱き、最後に「緊張していると思うけど側に私達がいるから大丈夫だよ」と言葉を残した。看護師さんにも私と同じ年の子供がいたからかもしれないが、子供らしくいてはいけなくて緊張していた私の心は安心感で包まれた。幼稚園の頃にナイチンゲールの伝記を読み、思いやりの心と手で人々を癒す看護師に憧れていた私は、その職業に就きたいと志をより強くした。また、その看護師さんが私の気持ちに気づいて寄り添ってくれたことは忘れられない出来事になった。

手術から1年のリハビリを経て大好きなダンスが出来るようになった私はダンスと看護が似ていると気づいた。ダンスは1人ではなくチームで1つの作品を作ることもできる。そのためには作品への共通認識をそれぞれが持ち、1つの目標に向かうことが大切になる。そして個人のスキルを練習で高めれば高めるほどチームに還元され、より良い作品になる。人の動きの観察や多角的な視点も必要になる。同様に、看護や医療も1人ではなく多職種がチームとなって患者さんがより良い人生を送れるように動いていく。共通認識を持つという点において患者さんは医療の中心にある。また、疾患への知識や技術の向上が患者さんへの看護と患者さんの心の安定や安全につながる。そして、訪室時に言葉だけではなく五感を使って注意深く患者を観察し、アセスメントをする。これまでダンスに取り組んできた姿勢が看護にも通じると分かった今、私は自分自身の手術体験から看護師像というものを胸に抱くようになった。そして私は春から大学4年生になる。あの夜、優しく寄り添ってくださったあの看護師さんのように表面だけではなく心の些細な変化に気づける観察力を持った看護師になりたいと強く心に決めて、今日も机に向かう。